

令和6年度第1回陸前高田市総合教育会議 議事録

- 1 日 時 令和6年10月23日（水曜日）
午後1時25分 開会
午後3時30分 閉会
- 2 場 所 市役所3階政策会議室
- 3 出席者 佐々木市長、山田教育長、安田教育委員、木下教育委員、遠藤教育委員、
佐々木教育委員
- 4 事務局 千葉教育次長、吉田学校教育課長、黒澤企画調整監、及川管理課長補佐、
清水政策推進室主事

○及川管理課長補佐

定刻より若干早いですが、出席される方全員そろいましたので始めさせていただきますよろしいでしょうか。

○及川管理課長補佐

ただ今から、令和6年度第1回陸前高田市総合教育会議を開会いたします。
はじめに、佐々木市長から御挨拶を申し上げます。

○市長

教育委員の皆様におかれましては、御多忙の中、本市総合教育会議に御出席いただきありがとうございます。

本日の報告事項は、全国学力学習状況調査についてと、国際的感覚と、広い視野を持った児童・生徒の育成についてでございます。最初に、全国学力学習状況調査につきましては、小学校6年生と中学3年生を対象に本年4月18日に実施したところであります。

この調査結果に基づき、本市の教育施策の成果と課題を検証し、確かな学力と学力を育む教育の推進に向けて、様々な改善を図って参りたいと考えておりますので、教育委員の皆様から忌たんのない御意見を頂きますよう、よろしくお願いいたします。

次に、国際的感覚と広い視野を持った児童生徒の育成についてでありますけれども、東日本大震災をきっかけに結ばれております本市とアメリカのカリフォルニア州のクレセントシティ市との交流や絆、これまで同市と行ってきました高校生の相互交流、あるいは、市立博物館にも展示されておりますけれども、震災時に太平洋を往復した高田高校の実習船かもめや今年はタイルアートです。クレセントシティ市にも同じアートがありますが、そういったタイルアートの設置などを通じて、両市の交流が年々深くなっているところでございます。震災という辛い経験を経ておりますけれども、この中で結ばれましたクレセントシティ市との交流によって、明らかに、生徒の外国人に対する壁といいますか抵抗、あるいは英語に対する親近感が格段に、これまでとは違って、高校生の中に英語や国際に対する親近感が増したように思っております。

これから進展する少子高齢化の社会の中で、本市の人材育成を推進して、他の市町村との差

別化を図る上でも、こういうことは、重要な要素ではないかというふうに考えております。

今後中高生の充実した英語教育の環境整備を進めていかなければならないと考えているところでございます。その上で、本日は高田高校の組織をクレセントシティ市との関係を踏まえて変えることができないかという作業をしておりますけれども、秋田県の国際教養大学、現在東大以上に入るのが難しい大学の一つと言うような評価も伺っておりますけれども、こういった、大学と当市との間で、交流を考えております。

また、その交流を活用しながら、今後、英語コミュニケーション体験プログラムとして、大学が実施しているイングリッシュビレッジというプログラムがありますが、本市の中高生の英語教育の推進に向けた取組について今後の展望を御報告いたしますので、併せて御意見を頂きたく存じます。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

○及川管理課長補佐

続きまして山田教育長から御挨拶を申し上げます。

○教育長

今日は皆さん、大変お忙しい中、総合教育会議に御出席いただきまして、誠にありがとうございます。

この会議は、市長を交えて教育関係の問題、課題、あるいは情報についてお互いに共有し合ってよりよい行政を展開していくためということで、毎年1回ないし2回、開催しているものでございます。

今年は全国学力調査を材料にして、本市の小学6年生、中学3年生が中心になりますけれども、教育と学力について、どういう状況であるかといったところを、皆さんにお知らせし、課題があればその対策について皆さんから御意見を頂き、そしてまた、予算が必要であれば、その時期でありますので、併せて市長にもお願い申し上げたいところでございますので、忌憚のない御意見をいただければと思っております。よろしくお願いしたいと思います。

また、秋田の教養大学の件につきましては、うちの中学生、震災以降様々な交流を重ねておりますが中でも強いのが名古屋との交流でございます。名古屋の交流は皆さん御存じのように、夏には向こうから来て、冬はこちらから参りますが、特に去年あたりから、この交流の希望者が非常に多くなってきてまして、2年生を対象に交流しているのですが、2年生の在校生の半分がこの交流に加わりたいということで、両校から10名ずつ20名選抜しております。2つの学校から50名近い応募者がありまして、指導主事も行って、面接もして、そして10人を選抜したところです。

さらに、6月にクレセントシティ市から高校生が参りましたが、高田高校だけというのはもったいなく、中学校に呼びかけたところ、非常にいい交流ができたということであります。クレセントシティ市の教育長とも話したのですが、今まで高田高校は隔年交流でありましたけれど、お互いの交流の規模を小さくしてもいいからぜひ毎年交流したいとのことでした。向こうの教育長からは、それが軌道に乗ったら、ぜひ中学生同士の交流を検討していきましようとい

うことです。そういった流れの中でありますので、中学生の外部との交流はもちろんのこと、これから英語力を身につけて、海外との交流も活発にしていく時期になってきたなということをもったの企画でございますので、事務局からの方から説明申し上げますので、その辺に対しても御意見をたくさんいただければありがたいというふうに思います。

いずれ、今日は貴重な機会でありますので、どうぞ日頃、お考えのところ、忌たんのないところを申し上げていただければ大変ありがたいというふうに思いますので、よろしく願いしたいと思います。

○及川管理課長補佐

続きまして次第の３報告に移ります。

なお、ここからの進行につきましては、佐々木市長にお願いをいたします。

○市長

それではしばらくの間、議長を務めさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

次第の３、報告に入ります。

最初に、「全国学力学習状況調査」につきまして、事務局から説明をお願いします。

○吉田学校教育課長

大変お世話になっております。

学校教育課吉田の方から御報告させていただきます。

令和６年度陸前高田市の児童生徒の全国学力学習状況調査の説明でございます。

第１０次陸前高田市教育振興基本計画では、「学びを通じ、未来を創造する心豊かでたくましい人づくりを基本理念としております。その具現化のために、確かな生きる力を育む学校教育を通して、様々な施策を展開しております。

今年度、その中の重点施策の１つが、「確かな学力を育む教育の推進」です。当市では、小学４年生以上では、年２回の学力検査を行い、子供たちの学習状況を調査分析し、授業改善や指導に生かしております。今回御説明するのは、４月に小学６年生、中学３年生を対象に行われた全国学力学習状況調査の結果でございます。受験者数は小学６年生１０６名、中学３年生１３４名です。

では始めに、生活や学習に関する子供たちの意識調査の結果について御説明いたします。

１の表を御覧ください。こちらは質問項目の中から、徳育に関する部分を抜粋し、小学６年生、中学３年生に並べて記載しております。緑の部分が陸前高田の子供たち、赤の部分が岩手県、青の部分が、全国の子供たちの積極肯定した割合を示しております。本市の結果の隣に矢印で示しておりますのは、全国よりも高いか低いというものです。ピンク色をつけておりますのは、全国、県よりも高いものとなっております。色をつけていないのは低いものか、全国よりは高いですが県より低いというものについては色をつけておりません。

では、まず学校に関する質問項目、学校に行くのが楽しいと思うか、自分の良いところもあるか、友達関係に満足しているかというここの項目につきましては、おおむね全国よりも高い

傾向にあります。陸前高田の子供たちは、友達や先生との関係も良好で、学校生活を楽しく送っているということがわかります。

また、その下の地域や社会に関する項目につきましても、「人を助けたい、役に立ちたい、地域や社会に貢献したい」という項目について、全国よりもかなり高いことがわかります。

特に、一番下の「地域に貢献したい」という項目については、「当てはまる」の他に、「どちらかというと当てはまる」という回答を含めると、小学生は95%の子たち、中学生でも88%の子供たちが、積極肯定回答をしており、全国をかなり上回っております。

このように、心豊かな子供たちが育っている背景といたしましては、震災後、復興教育や防災教育に力を入れてきたこと、また、学校運営協議会や、様々なボランティアさんの力、地域の様々な人材を活用した、地域と一体となった学校運営の成果であると捉えております。

この地域の力というのは、陸前高田市の教育の大きな特徴でもあると考えております。では、2ページ目を御覧ください。

2ページ目の上の表は、家庭生活に関する調査です。朝食、起床時間、就寝時間に関しては、全国よりも上回っており、規則正しい生活を送っている子供たちが多いことがわかります。

次にその下のメディアの部分です。上が、平日のゲーム時間2時間以上の割合、下が平日のSNSや動画視聴の時間が2時間以上の割合です。こちらの調査は、実際の調査に関しては、4時間、3時間、2時間、1時間、1時間以下と、かなり細かい調査となっておりますが、2時間以上としてもだいたい全国の結果と共通する部分があります。2時間以下としてまとめて集計しております。小学生のゲーム時間に関しては、全国が49%に比べ、34%、SNSなどについては、33%に対する21%となり、小学生に関しては、全国より低い状況になります。

こちらは高ければ高いほど、学習時間が短くなったり、就寝時間が遅くなったりしますので、低い方がよいととらえ、黄色の色をつけております。一方、中学生に関しましては、全国よりも低い数値ではあるものの、かなり全国に近いような数値になっており、メディアコントロールが必要であるというふうにとらえております。

続いて、知育の部分です。下の表を御覧ください。

まずは、将来の夢や目標については、小中学生ともに全国を上回っております。また2つ目の友達との協働的な学習ですが、3つ目4つ目の授業への取組方についても、全国を上回っており、意欲的に学校の授業に取り組んでいることがわかります。

次に、国語の授業と算数の授業がわかりますかという質問に対しては、小学生以外は、肯定的な回答をしております。多くの生徒たちが授業がよくわかると回答しております。ただ、この後の評価の結果と比較したときに、そこにはギャップが見られますので、その点に注目して、何か改善していかなければならない点があると捉えております。

最後に、家庭学習のところですが、こちら3時間以上、2時間以上、1時間、30分、30分以下、全くしないと、かなり細かい調査となっておりますが、小学生は1時間以上、中学生2時間以上として集計しております。平日、休日ともに、小学生については、1時間以上学習している児童は全国を上回っております。2時間以上となると、全国を下回っております。

ただ、毎日、家庭学習に多くの子供たちが、定期的に取り組んでいるということがわかりま

す。

一方、中学生になると、家庭学習を休日は2時間以上行っているものの、平日になると、全国を下回っております。1時間っていうところに注目してみると、全国は上回っておりますので、1時間はやっているけれども、中学3年生としては、2時間以上はなかなか行われていないというような状況にあります。

こちらの調査は4月に行っておりますので、まだ部活動に取り組んでいる子供たちが多い状況ですので、学習が、家庭では平日は1時間ぐらいで終わっているのではないかなということが予想されます。

以上が、子供たちの意識調査の結果になります。

続きまして、3ページ目を御覧ください。

国語、算数数学の結果に移ってまいります。まず3ページ目、小学生の小学6年生の国語についてです。全国平均67%に対し、本市は68%と全国平均をやや上回っております。2番目の正答数の分布グラフを御覧ください。横軸が正答している問題数、縦軸が児童数に対する割合でございます。こちらを見ると、一番多いのは、10問正解している児童が約19%というふうになります。このグラフを踏まえて、結果と現状でございます。

小学校の国語に関しては、無答率が低く、つまり答えを書いていない子供はあまりなく、最後まで問題に取り組んでいるということが、この調査結果からもわかります。

また、言葉に関する知識の定着と読むことの正答率も高い状況にあります。この要因といたしましては、比較的人数が少ない学校が多い中で、一人一人に寄り添った授業が行われていること、あとは、一人一人が授業の中で、自分の考えを述べる回数が多いこと、表現する機会が多いことから、このような国語の力の成果につながっていると思います。

一方、話す聞くに関しては、課題が見られる学校もあります。こちらについては、下半期の取組として、学校同士がICTを使ってオンラインで、相手意識や目的意識を持った多様な言語活動に取り組むなど、推進していければなと思っております。

また、中学校への進学を見据えたときに、丁寧に丁寧にだけではなく、自力である程度長い文章を読めるようになることや家庭学習の内容の見直しも図っていければなと思っております。

続きまして4ページを御覧ください。

こちらは小学6年生の数学です。全国63%に対し、本市は59%と、やや全国を下回っております。正答数の度数分布を見ると、10問から12問を正解している児童が少ない状況にあることがわかります。この辺りを正解する人数を引き上げていかなければならないと考えております。また同時に、解答時間が足りないと感じている生徒も多いです。ただ、国語と同じく、最後まで粘り強く取り組んでおり、無答率は低い状況にあります。特に5年生の学習内容である「変化の終わり」、「変化と関係」、「割合」の正答率が少し低い傾向にあります。ここが改善されると全国と近くなってくるのではないかなと捉えております。つまりきの要因として考えられるところは、4年生段階の、割算の時点でつまづいている児童が見られるところから、高学年のさらなる積み重ねが難しい状況にあるということも考えられます。

また、授業の中で、友達や先生の考えを聞いて分かったらなるほどなと理解したように見えても、実際自分で問題を解くような時間が不足していると、定着に至っていないことも考えら

れます。そこで、下半期としては、児童の学習状況に合わせた個別最適な授業の展開と同時に1番目は、家庭学習の見直しを図ってまいりたいと考えております。

続きまして、5ページ目を御覧ください。

こちらは、中学校の国語になります。上の段が、今回の中学3年生の結果で、下の段が同一集団が小学校6年生のときの国語の結果となっております。まず今年度58%に対して本市は54%で、マイナス4%です。小学校6年生段階で、全国と同程度ということを見ますと、少し下がっていると思っております。正答数の度数分布を見ましても、小学6年生のときよりも10問正解している生徒が低くなっているところも気になる場所であると思っております。

中学校の現状といたしましては、今年度、小学校の課題にあった、話す、書く、聞くの部分は、全国平均と同程度となっております。

一方、書く、読むなどの正答率が低い状況にあります。時間がなく、最後までとり着かなかったという生徒も一定数おります。要因といたしましては、小学校と比べ、文章がかなり長くなってきておりますので、更に抽象的な言葉も増えてきております。そうなってくると、限られた時間の中で、一定量以上の文章を読み取ることが難しい状況にあると考えられます。

また、家庭学習においても、どちらかというと漢字練習が中心で、思考判断を伴う内容の取組が不足しているのではないかなととらえております。それらを踏まえて、様々なツールも使いながら、もっともっと多様な文章に触れさせることであるとか、ある程度一定の条件のもとで、課題に取り組む経験、これを積み重ねていくことが大事であると考えております。また、家庭学習についても、思考や表現を伴うような内容を、子供たちに与えられればなと思っております。

では、6ページ目を御覧ください。

こちらは中学校数学になります。全国52%に対し、本市は42%と10%を下回っております。小学6年生のときと比べると、全国との差が広がっているなという状況にあります。度数分布表を見ましても、小学校のとき、11問、12問当たりの正答者が多かったのですが、11問以上正解している生徒数がかなり少なくなっております。同時に、三問以下の正答者が増えているのも大きな課題と思っております。結果と現状の内容といたしましては、記述式の問題の無答率が高く、全く手がつけられない生徒が一定数いるという状況にあることです。知識技能の問題については、全国と同程度で、比較的子供たちが頑張っていると思っておりますが、中学3年生になると、問題がかなり高度になってきておりますので、筋道立てて根拠を明確にし、説明する問題については、全国とかなり大きな差がみられます。要因といたしましては、先ほど小学校のところにも共通する部分がありますが、生徒の「わかった」というのが、「どちらかというと答えがわかった」か「わかっていない」かにとどまっていて、類似問題とか活用問題を自力では解けない状況にあることが予想されます。

また、家庭学習も国語と同様、単純な計算練習や用語の復習にとどまっているのではないかなと思います。これを踏まえまして下半期としては、つまずきの分析を生かし、授業と家庭学習を連動させ、もっともっと定着を図るような取組を行っていききたいと思っておりますし、現在、そのような取組を進めているところです。

あとは、わかる生徒が答えて、他の生徒はただ聞いて終わりではなく、「すべての生徒に説明

する」、「時間内に解き終える」などの経験を積み重ねさせたいと考えております。

では、そのような結果を踏まえて、7ページ目を御覧ください。

こちらは、小学6年生、中学3年生だけではなく、市内の子供たち全員に取組を推進していきたいと思っているところで、1つ目は、中学3年生段階で見られる課題ですが、思考判断を伴う問題の正答率が低いことです。それから無答率が全国と比べ高い分野があるということです。これを踏まえて、陸前高田市の子供たちには、根拠を基に、自分の言葉を使って説明する力、筋道立てで考えをまとめる力、粘り強く最後まで問題に立ち向かう力、そして一人一人が自分で学習を振り返り、向上心を持って主体的に学びに向かう力を下半期重点としてと、取り組んでいきたいなと思っています。

具体的には、その黄色い枠の中の部分です。授業の中でわかったら実感できる、定着の時間の確保、家庭学習との連動、そして次の時間に、前の時間の学びを確認できるような導入の工夫指導だけではなく、評価にも力を入れ、さらに細かくチェック体制をとりながら、指導の改善、子供たちの家庭学習の取組の、改善を行ってまいりたいなと思っています。

以上で報告を終わります。

○市長

それでは、ただいまの説明につきまして、質問、御意見等がありましたらお願いいたします。

○遠藤委員

算数の場合はつまずきがあると、中学校でつまずくのはわかりますが、国語でも小学校で差が出てくるものなののでしょうか。

○吉田学校教育課長

やはり中学校3年生段階になると、問題の文章量が長く、難しくなり、決められた時間の中で、解答しなければならないので、今まで教科書で出会ったことのない文章をその時間で読むということが、かなり中学3年生段階でハードルが高いと考えています。

そのためには、授業の中でいろいろな文章に触れさせる経験が大事なかなと思っています。小学校段階では比較的文章が短いので子供たちが頑張って読めるのですが、中には、少し難しく、読めない児童も6年生で多少出てくるような現状にあります。

○遠藤委員

様々な文章に触れさせるのは、教科書だけではだめなののでしょうか。

○吉田学校教育課長

そう考えております。例えば教科書を使って、「教科書だけ」ではなく、その教科書に類似したような様々な読書であるとか、現在高田では、タブレットにプラス日報という新聞の、いろいろな記事が検索できるようなアプリを入れておりますので、それらを重ねて読むとか、そのような経験が、教科書だけではなく様々な文書に触れさせる経験が必要ではないかと考えます。

○佐々木委員

全体で見たときに、時間が足りないとか、計画の時間を取るとか、時間、時間と考えることがたくさんあります。読む際に、時間がかかるのは、読む力はどこでどのように養われているかということだと思います。この間、東中に行った際に子供たちの生活はどのようになっているかと聞くと、メディア漬けになっていると聞きました。メディアの中でもテレビとなく、SNSやYouTubeかのようなものです。そういう生活をしながら、小説とかを読んでいるのだろうかと考えます。1年間に、1冊も読んでいるのかなと思うぐらいです。いわゆる身になる文章をどの程度読んでいるのかと、それも中学生だけではなく、小学生も、そういう力が、ある一定の決められた時間で読むというのは大切だと思います。そういうところを、ずっとやらないでいきなりテストのときに、教科書だけや授業だけという時間でやるというのはもうテストに対して、対応ができなくなりつつあるというのが出ていていると感じます。だから、根本的に家庭学習も、もうその域に入っていけないと読み解く力が不足してしまうのではないかと思います。今回、算数、数学も通して時間が足りないというのは、そういう基本的な能力、文章読解力が不足しているのかなというのは、すぐ改善するものではなくて、積み重ねてずっときているものなので、根本的に低学年の、読む時間が短いところから始まって、ある程度小学校6年生が、これぐらいの文章は、これぐらいの時間で、読み取らなくてはいけないということを、先生方も、学校も認識しながら、取り組まないとなかなか難しいと思います。これが高校になって、共通のテストになると、とても時間がないです。それこそ無答、無答で、はね返ってくるみたいな感じで、半分も読み終わらないうちにもう終わってしまうようなことを聞いたときに、小学校の丁寧さでは中学校の早さについていけず、中学校の丁寧さでは高校に行くまた早さについていけないです。だからその早さをどこかで前もって経験しておかないと、早さには読む力もあるのですが、解く力とか、算数・数学だとか、そういうことの時間の先に読む力とかそういうのと時間がすごく大切です。あくまでテストだけではなくて、最初の「生きる力」です。「確かに生きる力」につながっていくんだろうと思います。

私が感じているのは、子供たちが、確かに生きる力には、ディベートでどの程度、やり合って、極端に言えばうち負かすような感じの子供たちが陸前高田市の方にどれぐらいいるかということです。優しさだけでは、私は「生きる力」にはならないと思います。

○木下委員

国語の力は本当に難しいと思います。どこで国語の力がつくのかと教員のときからずっと思っていました。極端な話、できる子はできるのです。

少し前まで、中学校の国語は結果が良かったです。今まで中学校にいくと陸前高田市はなぜいいのかなと、失礼ながら思っていました。それに、授業がすばらしいだろうと思っていましたが、何年か前に、国の方針変わって、それまで、小学校でも1つの物語文を、例えば20時間ぐらいかけてやっていたものが、この「は」と「が」等の違い等について、言葉1つ1つにこだわって、1時間で1ページぐらいをやっていました。

ただ、だんだん物語を嫌いになってきました。こんなにすぐに読めばわかるものに何時間もかけてくどくどやるので面白くないっていう批判もどんどん出てきて、それが半分ぐらい時間

減らされ、先ほど学校教育課長が言ったようにいろいろな本を読みなさいと、1つの文章だったらそれで発展的にやりなさいっていうふうに変わってきたのです。中学校はもっと極端で、本当に長い全部読むのに5時間かかるような文章を5時間でやるとかそういうふうになってしまったときに、やはりそこを、変わったときに展開をしていいのかわからないといいますが、授業でどうやって同じ力をつけたらいいのかわからないというようなことがあるのかと思います。

○安田委員

何回か前の教育委員会の定例会で、実際の問題とかを解いてみたのですが、こんな難しい文章を解いてみないといけないのだなと思いました。私とかもそうなのですが、今の時代って例えばスマホで簡単に情報を得ることができます。

また、情報を得るときに明らかにその人の履歴とか、そういうものに合わせて、フィードバックして上がってくる。そして、よく分からないですがアクセス数を稼ぐために、ワンクリックである程度読ませて、良くも悪くもつまらない記事をわざわざクリックするのじゃなかったということがあります。YouTubeを倍速とか4倍速とかで見ているとか、タイムパフォーマンスとかがすごくネット環境の整っているデジタルネイティブの子たちがワンクリックでわかりやすくすぐ情報エッセンスを得るということにすごく慣れさせられているから、そういう日常の中において、試験問題でちゃんとした文章の中で、何をどういうふうに取り取るかに対してすごくギャップがあると思います。その長い文章に対してどのように、ギャップを自分で埋めていくのか、というのはきちんとした本や評論を読むこともあったりとかすると思うのですが、いくらこうタブレットの情報を与えても、こういうものがあるよと言っても、今であれば無料で著作権が切れた小説は読み放題になることもありますが、自分が見ている文章がタイムパフォーマンスのもとにねじ曲げられることがあるということはどう教えていくか、

そもそもそういうことを知らないでそれが当たり前だと思っているとすごくギャップがあります。

文章にはそういうものとそうではないものがあるっていう、その世の中の摂理を学ばないと多分、生きる力にならないのかなと思いました。最近の時事問題で強盗等の闇バイトがありますが、ホワイト案件と呼ばれて集まってみたら強盗であるとか、若者がびっくりするようなことに飛びついて、20代の子たちがそうやって捕まっています。何で引かかるのだろうか、私たち大人の発想はそのような感じなのですが、もしかしたら基本的にそういう読み取る力とか、裏の情報、影の情報とかそういうこと自体が欠落しているからもしかしてこういうふうに関わったり、そういうことが増えているのではないかと逆に恐ろしくなります。

ただ、そういう世の中の流れを全部変えるのは、難しいと思うのですが、そういう世の中になってきているからきちんとした文章を読むこと、そしてタイムパフォーマンスで情報を得ることとそういうことはまた別の次元の話というふうに生活様式を認識する機会とか、教え込むとか、私たちの年代の人たちは最近のものと比較できますが今の若い人たちはそれが当たり前で育っているんで、文章だったりそういう、読む力が生きる力になるんだよってということを教えてあげて、学ぶ力は気づきだだと思うので、そういったところも必要で、その中

で、子供たちがどういうふう選んでいくかだと思います。

○吉田学校教育課長

中学校3年生の国語の最終目標のところが、批判的に文章を読み、自分の考えを形成するというのが一番大きい目標でもあります。それは、物事の善し悪しをきちっと根拠を持って判断するということなので、先ほど委員がおっしゃられたように何が正しいのかっていうのを、様々な統計をもとにきちんと明確に、子供たちが考えたり表現したりする力を中学校3年生までにつけさせたいと考えております。そうなったときに、この世の中が今こうなっているということも踏まえて、いろいろな資料を子供たちに活用させることで、将来的に生きる力に繋がるような力というのもつけさせていきたいと考えております。

○市長

数学等の試験は、いわゆる高校入試や、中学入試等のそういう試験の問題と似ているのでしょうか。それとも、学力調査のための特殊な問題なのでしょうか。もし、入試に出てくるような問題等と似通った問題であれば、例えば長文読解などのどこから読むかなどの効率的に解けるコツがあると思うのですが、テクニックとして都会の塾等に通う子は身につけていて、必ずしも国語力ではないと思うので、こういった問題なのだろうと思いました。

○吉田学校教育課長

高校入試に近いように、今求められている力を元に作っているので、比較的にかなり高校入試のように短時間の中で見たことのない文章を解かなければならないようなものになっております。

あと、2つの文章を比較しながら問題を考えなければならないようなものだったりします。

先ほど市長がおっしゃられたように、まさにそういう問題を解く経験のない子たちにとっては、解き方がわからずに、最初から順番によって最後時間がなくて終わってしまう場合もありますので、問題の書き方についても、経験が必要かなと思っております。6年生段階で、そうだと思いますが、ページをめくって、そして次のページに問題があったり、そこを比較しながら解くというような訓練が必要なのかなと思います。

○遠藤委員

下半期の取組の中で、「家庭学習との連携」が入っておりますが、学校、また先生方が理想とする「家庭学習の連携」というのはどういったものなのでしょうか。

○吉田学校教育課長

私も中学校教員をしていたときに、家庭学習で1人勉強ノートを多くの学校でやっておりました。1日2ページ、中身は自分で必要なものをやってくださいというものです。そうすると子供たちは、比較的に早く終わらせたいので、漢字練習で終わったり、もう分かっている計算練習をしたりしてしまうような場合があります。それだと、つまずきに対応するような学習に

ならないので、家庭学習として、例えばマークやプリント等、今日の授業でやった問題を実際に自分で解いてみるような宿題としての家庭学習を出し、さらに余裕があれば、1人勉強を主体的にできる子供たちになればいいのですが、まずは子供たちの学び方を身につけさせるための家庭学習の見直しを現在やってるところです。

○遠藤委員

できる子はできて、できない子はできないということがあると思いますが、そこに親を巻き込む仕組みはありますか。

○吉田学校教育課長

確かに小学校になると特に家庭との連携が大切です。その辺りについても各学校の中で、通信であるとか、3者面談のときに話題にしたりもしてるところではあるんですが、やはりもっと家庭と情報共有をしながら、やらなければと思っておりますので、校長会議でもその辺りを話したいと思いますし、家庭を巻き込んだ形で、取組を推進していきたいと思います。

○遠藤委員

陸前高田はそこが弱いのかなと思います。都会だと、塾に行ってしまうと勉強するのが、ここにはないので、家でどこまで勉強させるかということなんですが、先程の課長の話だと、自主性に任せるということは、できる子はどんどんやってし、そうでない子は宿題が終われば終わりということで、そこで終わってしまいます。家庭の方々を巻き込んだ形がいいのかなと思います。

○木下委員

この結果を見て、例えば中学校国語の先生方が集まって、その結果どう分析するかという辺りが、一番大切なんだろうと思います。自分が授業をやってみて、学習指導要領に沿ってまずやるわけですが、テストの中身も学習指導要領に沿って出ているわけなので、授業でやったものができていとなれば、授業が良くなかったのか、分析が一番大切だと思います。最終的に教諭は学習指導要領に沿った形でいかに焦点化しており、効率的な授業はあんまりよくないけれども、試験のためにはある程度効率も考えながらということになると思いますが、そこは、照らし合わせて学習指導要領と授業とテストの結果、そこで先生たちが分析するのが一番いいのかなと思います。その裏には、多分子供たちの個人のそれぞれの家庭環境とかいろいろなことがあるとは思いますが、まずはそれを抜きにすることが必要な気がします。それから算数や数学ですが、岩手県はとても低いです。算数は、力の差がすごく大きいので、習熟度別の授業を県、県教委でも進めて、保護者にも言ってそういう授業をしますということでやりましたがなかなか効果が上がりませんでした。

しかし、トップクラスの一部の子供はどんどん習熟度別の質が高いので上がっていますが、中位クラスや下位のクラスの子供たちにはほとんど効果がないというのは、日本の東京大学の先生も言っていて、一緒に分かっても分からなくても、難しい問題に挑戦する等の経験をさせ

た方がいいこともあります。

○安田委員

家庭を巻き込むのはすごく難しい気がします。価値観の違いもあります。私とか、親の世代は宿題とか勉強は、学校の先生に任せれば何とかかなと思っていました、実際、私も子供を持ってから、丸付けを親がすることに驚きました。親が丸付けし、直させて、学校に持たせるとこまでやらやらなければいけないと先輩たちからその様に言われました。今、特に共働きが当たり前で、お母さんたちもぎりぎり5時、6時、7時ぐらいまで働いて、急いで帰ってきて家事をしてという生活様式の中で、家庭を巻き込むのは難しいと思いますが、やはりこの危機感を、保護者と共有してかないと、どうにもならないだろうと思います。

学校の授業の中でできることっていうのは限られていて、24時間の中で、学校の時間も長いですが、やはり家にいる時間の中で、テレビ見ながらでも、勉強を学校の先生に任せきりではなく、やってかなければいけないんだよっていうことを訴えていかないと親世代の価値観は、変わらないし、忙しいからやってくればいいよみたいな感じなので、うまく考えていきたいなと思います。

○木下委員

親がこれを見たときに、どれだけ危機感を持っているかと言われたらどうなのでしょう。德育の部分を見て高い低いと思うかもしれませんが、自分も勉強できなかったからという部分もあるのでは無いでしょうか。自分の生き方をして欲しいことと、何かしたいってというときに、必ず勉強はついてくるものなので、そのときに頑張れる力って非常によく言われるものですが、先生たちはそれをつけながら点数を上げながらとやってると思うので、授業は必ずしもこの入試でテストのためだけでない部分もあるのが少し生方にとっては辛いことだろうかなと思います。

○佐々木委員

関連するのですが、家庭学習に対する期待度も大きいですが、それを受けとめてくれる親の意識がどの程度かなと思います。極端な話ですが、県北の方に行ったときに、学力向上と言ったら、面談であんまり学力が高くなるとここの土地から出て行ってしまいうから言わないで欲しいと言われました。こういう考え方でいると、期待度がすごく低くなります。この辺りでも高校に入ればいいや、程度で考えてる保護者もいます。実際、高校入試も定員割れを起こし、学級減をせずにずっと来ています。勉強をしなくても希望を少し変えればもうどこにでも入れるというふうな雰囲気も漂っています。前のように入試だからという熱心さが欠けてきている。だから、これを変えるには啓蒙が必要だろうと思います。子供たちは、高校を終わったら就職っていう子も、いるかもしれませんが、決してそうではなく、上を望みたい子もたくさんいます。でも、親の意識がそうなのでという所もあります。具体のところ、各中学校、高校のいわゆるキャリア教育がポイントになるだろうと思います。

○市長

そういうようなあまり勉強しなくても、地元に残って欲しいと思う親御さんはかなりいらっしゃるのでしょうか。

○佐々木委員

かなりではないですが、県北の方に行ったときには、そのような保護者も1人だけでなくいました。

○木下委員

学ぶために勉強するのは難しいところですが、周りでいろいろな機会を子供たちに教えて、世界はものすごく広いということを教えてあげて、外国とも繋がってるし、それはどんな仕事でもうそうなんです。勉強できないから何でも良いでは無く、勉強することで自分の道が拓けていくということを多分先生たちは言っていて、勉強しろと言ってると思いますが、なかなか、そこが結びつかないです。具体的に交流とかすると、名古屋はあんな大きい所だとか、あんな大きいところで働いてみたいとか、そういう経験が昔より今はたくさん機会があります。だから将来の夢や目標を持ってますと答える子がこんなに多いと思いませんでした。キャリア教育で今盛んに中学校でもやっていますが、すごくいいなと思って、いろいろな人を呼んでお話を聞くと、すごいなと思ってそれが毎日の勉強とか自分の姿に繋がっていく、それは、ひいては非認知能力を高めることにも繋がっていくのだろうなと思います。

勉強、授業だけでなく、いろいろな学校行事もものすごく大切で、自己肯定感だったりやり抜く力だったりとかあるんだろうと思います。すべて無駄なものはないと思います。

○佐々木委員

今のテストの中で総合的な問題が多くなり、単純な正解を答える問題が少なくなっています。単純なところは覚えているのでしょうか。いわゆる小学校6年生段階で、漢字の読み書きをどの程度習得しているかや、算数で言えば、小数点や分数などの程度わかって中学に入っているのがポイントになるかと思います。積み残しの部分はどこかで何かしないとその子たちが中学校に行ったときに、小数点のわからない子が数学で面白くないななと思います。100にして、中学校に上げろというわけではないですが、全国を1つの目安としても、それ以上のところであげてやりたいなと感じます。

○市長

締めは教育長お願いします。

○教育長

たくさん意見いただきましてありがとうございます。皆さんの1人1人の御意見は全くその通りでございまして、今日は一体どうしたらいいのかということです。やはり全国学習調査、今まで佐々木委員がおっしゃったように、以前の問題とはかなり違って、単純な問題ではなくて、例えば数学でも、日常生活の中で足し算を出すとか、日常生活の中で、何倍になってるか

っていう、掛け算を出すとか、そういった簡単に計算問題を解かせるのではなく、読ませて解釈してそれで計算をさせるという、形になってきています。ですので、先ほど市長が高校入試とどう関係あるのかという質問だったのですけれども、全国学調は新しい学習指導要領を狙って学力感を問うている問題ですので、いろいろな民間の業者テストとか、それから高校入試もありますけれども、この全国学調で問われてるような形で、どんどん変わってきています。

ですので、国が、新しい学習指導要領を出して、これで求めているのはこのような学力感だというふうなところを通ってますので、それが入試に反映されております。その結果、岩手県はなかなかついておらず、この何十年残念ながら、全国学力調査結果は、全国最下位に近いわけです。辛うじて国語は中程度に位置してましたが、その国語もだんだん、下がってきております。国の方がいよいよ心配して、岩手県はこんな学力でいいのですかというふうな話が、県の教育委員会にあり、それに基づいて、去年、県の教育長から、学力向上と不登校対策を岩手県の教育の2本柱にしていくということです。知識、技能そして活用の部分と様々な段階がありますが、先ほど保伸先生がおっしゃったように、新しい学力が求められていますが、昔からの読み書きそろばん等の知識、技能のところは本当に定着してるのかということを見ると、やはりその辺がまだまだ不十分です。それで、課長が先ほどから話しております、何十年の岩手県の教育のやり方が本当に子供たちの学力が身についているかどうかということ、さっぱり変わらないものですから、ここで思い切って岩手県のやり方を、今までやってきたことと抜本的に変えなければいけないのではないかと思います。いわゆる成果と課題を検証した場合に、これまでの教え方でやはり駄目ではないかと思います。その1つがやはり、1人勉強です。自主的、主体的な学習習慣を身につけるという立派な目標はあるのですが、本当に1人勉強で自主的主体的な学習習慣についているのかということ考えますと、私は甚だ疑問です。そういうところは、やはりある程度習慣化してから、自発的についていくものであって、最初からそういう習慣が身につく訳ではありませんので、学校では教科書を勉強して、家へ帰ると、一人勉強という連動性のないのはやはり大きな問題だと思います。学校で勉強したことを家に帰って、今日先生が教えてくれたことが自分で本当にわかっているかどうかを確認する時間が、今の岩手の子ども達に足りないのではないかと思います。ですので「1人勉強よりも、授業の復習の学習をまず優先させましょう」というふうに切り換えを思っています。余裕があるものは、1人勉強をどんどんやっていけばいいのです。間違っても1人作業学習を、1人勉強としてやったところで、満足するのはいかなものかなと思います。年度から切り替えればいいのですが、急を要しますので、来週の校長会議で、調査ではっきり出ていますので今までのものは思い切って変えて、授業と連動した家庭学習を展開していきましょうといった形に、平日の学習をして、そして週末の課題として新しい学習指導要領の中で見られてる学習習慣とは、こういうものだよということで、例えば過去の全国学習調査の問題を、1題、2題でもいいから、週末土曜日、日曜日使って考えてもらうという形でやっていった方がいいのではないかと思います。長年、1人勉強に頼り切っている岩手県の指導方法がすぐ変わることは難しいところでもありますけれども、いずれ変えなければ良くはならないと思います、高田の教育方針は今、正念場かなと、大きな変わり目だと思っておりますので、委員の皆様にはご理解いただければなと思っております。

よろしくお願いします。

○市長

それでは次に2の「国際的感覚と広い視野を持った児童生徒の育成」についての説明をお願いします。

○吉田学校教育課長

国際的感覚と広い視野を持った児童生徒の育成を目指してというところでの取組のご提案でございます。

まず、第10次陸前高田市教育振興計画の中の1つに、グローバルな視点で地域の活性化を担う人材の育成ということを掲げております。外国語を用いて主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度の育成、実践的な基礎力の向上による国際交流活動、そして国際理解教育の充実、そこを目指すために、小、中学校としましては、小学校全学年で各教科における国際理解活動、国際理解教育の推進、そして3・4年生では外国語活動、5、6年生では外国語の教科の学習を行っております。ALTの活用をしながら、英語を聞いたり話したりする活動を通して、英語によるコミュニケーションの楽しさを小学校段階で味わうような学習を行っております。そのような英語に対する興味関心を持った子供たちが中学校に入って、教科の学習だけではなく、陸前高田市では、1年生全員にイングリッシュキャンプとして、立教大学の外国人留学生との交流活動を通して、英語を使ったコミュニケーションを楽しむような事業を展開しております。こちらについては、今年度はオンラインで行っているところでございます。

また、先ほど教育長が申し上げましたとおり、中学3年生では、デルノータ高校の高校生との交流を今年行いました。英語の授業だけではなく、琴と一緒に楽しむなど日本文化に親しんでもらうなどの交流を行っております。同時に、中学生全員に対しては、市の方から補助を出し、英語検定にチャレンジするような経験を行っております。

また、名古屋市交流を通して、リーダー同士が交流を深めるというような経験も行っております。様々な分野から興味関心を持ち、そして挑戦してみて、挑戦したことが自信に繋がり、もっと挑戦してみたいというような、1つのサイクルを、展開していければと思っております。

今回、さらに英語の意欲関心を高め、実践力の向上と新たな可能性、「もっともっと自分でこんなこともできるのではないか」や、「英語って面白いな」と思うような、中高生を育成したいと考えております。中高生のための英語研修プログラム、国際教養大学イングリッシュベレッジへの派遣を計画しております。

こちらは、国際教養大学のトレーニングを受けた学生スタッフがチームを組んで運営している英語コミュニケーションの体験プログラムでございます。大体生徒6人ぐらいのグループを作って、そこに日本人の学生、留学生1人の3、4人の学生が指導に当たります。3日間の様々な英語を使ったコミュニケーションのプログラムを通し、グループで協力しながら、最終的にはプレゼンテーションに向かっていくというような研修でございます。

具体的に派遣について御説明させていただきます。

まず目的の1つ目としては、英語でコミュニケーションを取るって楽しいと感じるような体

験を子供たちに味わわせたいなと思っております。そこから英語への関心だったり、学ぶこと全般への意欲を高めたいと思っております。

2つ目としては、他の中・高生だけでなく、大学生や留学生とのコミュニケーションを図ることで、自己表現力や思考力も伸ばすきっかけとしたいなと思っております。

さらに3つ目といたしましては、視野を広げ、自分の可能性ももっともっと伸ばしてみたいな、思うような生徒を育成したいと考えております。期間としては、来年度、秋の2泊3日で検討中です。参加対象は高田高校の1年生、市内の両中学校の2年生または3年生で、希望するもので、合計30名程度で考えております。研修内容としましては、あちらの国際教養大学のプログラムにそのまま参加させてもらうような形になっております。1日目は、ウォーミングアップ、または少しレクリエーション的な感じで英語を使う楽しさを味わいます。2日目は英会話のコツ、英語が読んだり書いたりするの苦手でもこんな方向だったらコミュニケーションが取れるよということやいろいろな視点でコミュニケーションの取り方を学ぶことができます。

そして、留学生のインタビューを通し、プレゼンテーションの準備を行い、最後には、私が見学させていただいたときはグループの留学生に対し、いろいろな質問をして、その人の興味関心を持つてるところをプレゼンテーションするというようなところでございました。

このように、グループで協力しながら、英語で自分で原稿を作ってそれを発表するというような、達成感を味わえるようなプログラムとなっております。この派遣を通し、期待される場所としては、1つ目は、間違っていないんだよというような研修になっておりますので、間違えても、みんなで上達しながら、調整していこうという雰囲気の中で、英語コミュニケーションに自信を持つことができるのではないかなと考えております。

2つ目は、自分でインタビューし、原稿を書いて自分の言葉でやり切るという達成感を味わってもらいたい、味わうことができると思っています。もちろんこのグループの大学生たちが丁寧にサポートしてくれますので、迷ったり悩んだりしたときは、サポートを受けながら取り組むことができます。

最後は中学3年生、高校1年生に将来の自分にいろいろな可能性があるよっていうことを気づいて、もっと新しい道を模索し、学び、将来こういう自分になってみたいなのというところに繋がってくれば良いと考えています。

以上で報告を終わります。

○市長

ただいまの、説明につきまして質問や意見をお願いします。

○木下委員

この研修をして欲しいと思いますが、重要なことで、自腹でしょうか。

○吉田学校教育課長

現在検討中ですが、あまり保護者負担が多くならないように、いろいろな子たちが積極的に参加できるようところで検討します。

○木下委員

震災直後にディズニーランドに招待するとかありましたが、全部無料とはいえ、結局それ以外のものはお金がかかります。そうすると限られてくることもありましたので、できるだけ配慮してもらえるとありがたいと思います。

○佐々木委員

関連ですが、あちらの大学生を呼ぶこともあるのでしょうか。

○吉田学校教育課長

人気のあるプログラムですので、こちらにというのは現段階では少し難しい状況です。

○黒澤企画調整監

基本的には2泊3日のプログラムになっていまして、金、土、日という日程で実施されます。

学生が金曜日にこちらに来るのはやはり大学側としては難しいとのことで、大学に行けば、開催できますという形になってるプログラムでございます。

○佐々木委員

何とか金曜日でも大学にお願いしたい。そうすると費用もかなり抑えられます。来て貰うのであれば中学生も、30人より多く呼べると思います。

○黒澤企画調整監

こちらのイングリッシュヴィレッジにつきましては年15回開催しておりまして、すべて大学に各学校なり、自由参加という形で来ていただいているプログラムになりますが、この、今のプログラムのやり方だと、行くという方針になります。今後、話をしていく中で、そういう可能性もないのかなというところは、大学さんとも話し合っていきたいです。

○佐々木委員

中高生の授業の時と大学生の休みが重なっていることは多くあると思います。だとすれば、金曜日にこだわる必要はないと思いますが、方針というのはまた別ですか。

○黒澤調整監

大学の夏休み、冬休みの期間に、開催できないかっていうところはお願いさせていただいたのですが、大学生がその時期、留学生もいるということで、帰省されるそうです。大学生を拘束できないか、派遣とか、大学の中でプログラムを開催するっていうことが難しいですっていうことで、その長期期間中は除いてくださいってとあらかじめ言われております。

○市長

国際教養大学ですが、行った方がいいと思う理由として、その大学の中自体が外国のようで

す。日本語を話す人がいません。日本人の学生も授業も英語で行っています。日本語だらけの陸前高田から子供たちが行くと、疑似外国体験ができるという大学です。緊張感も生まれると思いますし、そういう意味では来てもらって、授業を受けてよりは、本当に外国に行った気分になって、少しでも気分を押し上げながら勉強するっていうのは、すごく大切なのかなと思います。金銭的な面も配慮しますが、やる気のある本当にそれぐらいお金かけてもいいから、行きたいという子を行かせる方がいいのかなと思います。

○佐々木委員

呼ぶという効果を考えたときに、立教大学とか岩手大学の学生はグローバルキャンパスでの活動の発展的なことも考えられないかなと思います。

今は、そのオンラインの形での交流も可能だとすればオンラインで進めて、あとこちらに来た際の拠点のところがあって、そこでの交流などということも考えると、発展的なことから考えれば、そういう拠点的な所が1つあれば、教養大学の大学生が、泊まって交流ができることになります。それが、もしできれば分室なり、ゼミなそういうことをここでやれるんだよというのも発展的に望めるのかなと思います。

○安田委員

私も最初はこちらに来て貰うことができないかなと思いましたが、市長のお話を聞いて、国内にいて留学するような体験するのは良いプランだと思いました。私の業務の話ですが、グローバルキャンパスの今後を考えて、立教大学や岩手大学の学生が継続して陸前高田来る機会を持ちたいということで、その流れの中で地域の人達と交流するプログラムを実験的に行いました。岩手大学10名、立教大学10名の20人ぐらいと大学の先生が2名ずつ入っていただいて、地域の中に入って地域の課題とかを考えて貰いました。陸前高田市に興味を持ってもらうきっかけ作りや、子供たちとの交流事業になればと思います。先程の学力調査と関わりますが、学ぶ機会というのはやはりそういう体験すること気付くことが前向きになったりだとか主体的になることだと思うので、国際教養大学のプログラムもそうだと思いますし、グローバルキャンパスそのものということで今回米崎の仮設住宅体験館に泊まってもらって中高交流してもらうのも、キャリア教育になるのではないかと思います。良い体験を中学生から行う事で、どうして英語を学びたいのかや、大学ってこういうことを学ぶところなんだというのを座学やオンラインだけで無く生身の学生から学ぶことで、留学生もいるので体験プログラムを受け入れるのも良いのかなと教育の立場から思いました。

○遠藤委員

今度の研修に、高田から30名参加される予定ですが、他からも来るのですか。

○黒澤企画調整監

このプログラムは陸前高田市だけで、秋の2泊3日ということで、10月の中旬ぐらいでできないか協議させていただいて、中学校2校と高田高校のみで構成される陸前高田市だけ

の形でお願いしたいと思っていました。

○吉田学校教育課長

高校バージョンでは、全国各地から集まってくる子たちを対象にもやっているのですが、それに陸前高田がそこに混じるというのは人数的に難しかったです。

○遠藤委員

ぜひ良い研修なので、やっていただきたいと思います。大人になってから英語の大切さを痛感しています。教育委員会だけの問題じゃなくて市の方針としてなんだろうが、これを推進していく課はあるのでしょうか。

○市長

教育委員会と政策推進室です。

○遠藤委員

市に外国の方がいると、英語の勉強をし直さない駄目だという雰囲気が出てくると思います。これは教育委員会だけではなくて、市として、市の方針としてぜひ細かいところではなくてバーンと出していただきたいと思います。

○市長

まず英語が達者な職員の採用したいと思います。この国際教養大学といろいろコミュニケーションや意見交換をする中で「高田高校に国際交流課のような学科を新しく作り、受験用ではなくて、本当に英語を使う機会に気軽に英語を話せる生徒を育成したい」と国際教養大学の学長や副学長ににお話したところ、先ほどの学力調査に関係するのですが、日本の高校生は特に試験勉強していて、成績の良い子ほど受験勉強オンリーの高校生活を送っていてもったいないと言っておりました。国際教養大学としても高校の中で英語に親しむ学科を作るのであれば協力しようとのことでした。このイングリッシュヴィレッジも他の市町村での競争率もありますが、陸前高田市は特別に受け入れますと言われています。

これだけではなくて、国際教養大学の知見を借りながら広げていこうと思っています。そうすることで、当市を訪れる外国が増え、市役所の職員が外国人と接することも課題だと思うんですが少しずつ増えればと思います。

○遠藤委員

ぜひよろしくをお願いします。

○佐々木委員

あくまで今回は、国際教養大学のプログラムということですが、将来的には、陸前高田市がプログラムを組んで国際教養大学にお願いする形になればいいなと思います。デルノーテ高校などを絡めて、それから名古屋の中学生交流も絡めて、一気に一緒にはならないと思うんです

が、拡大して関係あるところがありますので、単独よりはもっとそういう力を借りれば良いと思います。

○木下委員

学生からすれば、ぜひ陸前高田に行って何かしようというプラス要素が無ければ、なかなか来ないのかと思います。今までは支援がありましたが、もう支援ではないということで、高田に来てやりたいと思う良さの部分はどこだろうと考えると「人」ではないかと思います。市長が言ったように、やはりも勉強したりとかもっと世界に目を向けるなど、二十歳のつどいの際に甘酒を作るとかね世界を見てるのはすごいと思いました。そういう人たちがこれからどんどん増えてくるだろうし、水産業はもちろんそうですがそういう時代に入ってきている、そういう機会がいっぱいあるということで、そこでぜひ来てくれれば、やっていることを膨らましていくのが良いのかと思いました。

○市長

ほかに質問等はありませんか。（「なし」との声あり）
それでは報告は以上とさせていただきます。

○及川課長補佐

ありがとうございました。続きまして次第の4、その他でございます。
事務局から、皆さんのお手元に、来週の教育委員会定例会の資料等を配布しておりますので、御確認いただければと思います。
その他、委員の皆様から何かございましたらお願いいたします。
よろしいでしょうか。

○佐々木委員

議会でも話題に出ていた小学校の、人数が少なくなった問題の中で、今後のあり方っていう話し合いをしていくタイミングになってきているのではないかと思います。

○及川課長補佐

それでは以上をもちまして令和6年度第1回陸前高田市総合教育会議を終わります。
どうもありがとうございました。